

「大谷大学三百年史」に向けて	1
昭和60年度「指定研究」	
研究計画紹介	3
昭和60年度「一般研究」	
研究目的紹介	4
昭和59年度「指定研究」	
研究経過報告	7
昭和59年度「一般研究」	
研究概要	11

研究所報

No. 13

1985. 9. 2.

「大谷大学三百年史」に向けて

学長 廣瀬 晃

真宗総合研究所では「真宗学事研究」が指定研究に定められておりました、大谷大学の三百年史の編纂ということで、準備をお進めいただいていることでもあります。指定研究でありますから、一応、私が代表者ということになっておりますけれども、私自身は、教学史とか、学事史とかにつきましても、殆んど素人ですので、どのような三百年史を考えるべきなのか、確かなことは申せません。ただ、逆に私が欲しいと思っております大谷大学の三百年史とでも申しますか、そのような期待のようなものを申してみたいと思います。

この研究所の発足の具体的な基礎となったと云ってよいのが、「近代における真宗の展開」という総合研究であったわけですが、あれは、大谷大学において初めて教学とか教団とか大学とかいう事柄を総括的に点検してみるという試みでありました。しかもその点検は、何かのためにするというのではなくして、特にあの場合は近代の100年ということでありましたけれども、その100年の学事の歩みをあらゆる角度から認識し直してみることによって、そのことによって、閉塞化された真宗の学事の公開性と非公開性との両面が見えてくるのではないか、ということを考えていたと思います。それがやがて「真宗学事研究」ということで、焦点が絞られてきたと思います。

真宗という宗教集団の成立以降、学事にかかわってどのような展開があったのか、それを確か

めることで、一つの道筋が見えてきたと云ってもよいのですが、しかしそれはどうしても学事の歴史的研究が中心にならざるを得ません。基礎作業として当然そうなるわけですが、それが中心となることで事が終わってしまって、思想としての地平とでもいいますか、そのようなところへ開かれることがなかなか困難ではなかったかという気がします。そういうことから云いますと、大谷大学三百年史というものは、これまで検討してきたことを大谷大学という名で表現するわけですから、そこでは思想としての社会的な普遍性というものが必要されるわけです。また、それに応え得るものとして自らに要求せざるを得ないということになります。最初に試みました「近代における真宗の展開」という、広いけれども焦点の絞りにくいあり方と、それを真宗学事史の研究という基礎的な確かめはできるけれども、思想的展開を見通すことが地平として困難だという問題と、この両方を受けとめて、大谷大学の具体的な歩みに即しながら、それを一度外側からも内側からも、問い直すということになるのではないか、或いは、そうであって欲しいと考えているわけです。

日本の旧制の大学は、国公私立を合わせて一口に60校と云われておりました、私立大学はそのうち35校と云われていますが、それらの大学は大体同じ時期、前後致しましても20~30年の前後で近代の大学として歩み出しておりますから、百年史、或いは、八十年史というものをあちこちで編纂しておられるわけです。その一々を拜見しているわ

けではありませんが、多くの場合、それぞれの大学の設立以後の歩みを紹介して、どちらかと云えば、事件史であったり、人物史であったりするわけです。その大学の100年なら100年という時を画して振り返ることは必要なことであるには違いありませんけれども、しかしそれを必要とする人は極めて限られていると思います。それらの大学の成り立ちに関心をもつ人々、大体はその大学の出身者ということになるわけです。それは確かに記念の出版として意味はもちますけれども、本当に積極的な記念になるのかというと、少し考えてみなければならぬ気がします。

大谷大学も同じような大学史を編纂するとしますと、八十年史ということになる筈ですが、近代の大学としての80年ということは、遂に本学では言葉にはしなかったのです。博綜館は80年の記念に建てられたと云ってよいのですけれども、敢えてそれを80年の記念とは云ってこなかったわけです。博綜館は、やはり学寮の創設以来320年という歩みを貫いているものの確認点として見るべきだと私は考えているのです。そうでないと、近代の大学という形をとった大谷大学の意味が不鮮明になるのではないかと考えるのです。その点で、私はむしろ、このたびの大谷大学の三百年史の編纂の積極的な意味は、或る特定の状況下にある人々にのみ意味をもつという懐古的なものではなくして、大きなことを云いますと、大学の歴史の思想性を問うとでも云いますか、大学史というのが、それ自体として現代に思想を公開するものでなくてはならないと思うのです。そんなことを思いますときに、それがなぜ特に三百年史かということになりますけれども、大谷大学の前身から今日に至るまで一貫して変らないことが一つあります。それは、親鸞によって開頭された仏教に拠るといふこと、これが一貫して変らないのです。ところが、その一貫性が、それぞれの時代の中で、どのような確かめ事として確かめられ、またどのような作用として世に作用してきたのかという点検が、実は大学という、学事を自らの任としている場所での役割だと云えると思うのです。ですから三百年史という意味は、320年の昔に創設されたということではなくして、そのあたりのことを300年というところで切って見ると一体どうなるのか、ということだと思います。そういうことが、

近代における真宗の展開の相を点検することと、それを更に進めました真宗学事史の研究とを通して、三百年史の編纂が必要とされる意味だと考えています。

もしもこれから編纂される三百年史が世に出ました時には、大谷大学を知ってもらうというだけではなくして、親鸞の仏教が、思想としてどのように表現されているか、そしてその歩みはどうかであったか、ということ十分に公開性をもってどこまで表現できているかということになります。教団の中に閉塞化された形で学問がなされなければならないということがありましたから、これを公開する形で思想を問うということになりますと、マイナスの作用がかなり見えてくるわけですが、そのマイナスの作用も積極的に洗い出すことになります。多くの大学史がマイナスの作用に消極的な傾向にあるのとは逆になると思います。マイナスの面をも積極的に洗い出すことによって、300年歩んできた大谷大学が、本来なさなければならなかった思想的な営為は、かくあるものであって、それがどのような苦労を経て表現されたのか、また、どのように歪められてきたのかを示すことになります。そのことが、一般の思想界からするならば、公的な高等教育の場で、思想が伝達されることの重さと困難さ、その強韌さと脆弱さを一挙に示すことになります。そのような大谷大学三百年史が望まれると思っていますことであります。(談)

(付記、本稿は、去る昭和60年7月8日、真宗学事研究班関係者の懇談の席上なされた談話の初め約3分の1を筆録したものである。)

大谷大学真宗総合研究所

昭和60年度「指定研究」研究計画紹介

昭和60年度の「指定研究」研究事業計画は、去る3月の研究所委員会において審議され、決定された。特定研究はこれまでの二つの研究名が継続されたが、研究課題は発展的に改められた。

「真宗学事研究」では、従来の、真宗学事についての基礎資料の収集、翻刻、カード化、講師年譜、年表化などの作業がより広い視野で進められると共に、今年度からはさらにこれまでの研究成果を踏えて、大谷大学三百年史の編纂に向けての、研究並びに資料整理、資料探索などの基礎的な作業が推進されることになった。

「海外仏教研究」では、過去三年間の研究成果を活用しつつ、海外における仏教研究の方法論を究明することを主たる目的として、昨年度に続いてフランス語圏における仏教研究の文献資料の収集と検討が進められ、並びに、一九六〇年以降のビブリオグラフィの作成の基礎作業にとりかかると共に、外国人研究者との共同作業による日本の文献資料の公開について具体的に検討されることになった。

委託研究については前年度の二件が継続され、その研究作業が更に推進されることになった。

研 究 名	研 究 課 題 及 び 研 究 組 織
真宗学事研究 (特定研究 代表 学長 廣瀬 泉)	研究課題 「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」 研究員 鈴木幹雄 (チーフ・教授・倫理学) 大桑齊 (教授・日本仏教史学) 木場明志 (専任講師・国史学) 草野顕之 (専任講師・日本仏教史学) 古田和弘 (所長・教授・仏教学) 片野道雄 (主事・助教授・仏教学) 嘱託研究員 福島和人 (大谷高校教諭) 西田真因 (大谷専修学院指導) 研究補助員 三本昌之 (修士課程修了生・日本仏教史学) 深田虎雄 (博士課程修了生・日本仏教史学) 片山伸、金石忍、熊木剛、宮崎健司、綿谷勝信 (以上博士課程)
海外仏教研究 (特定研究 代表 学長 廣瀬 泉)	研究課題 「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」 研究員 長崎法潤 (チーフ・教授・インド学) 多田稔 (教授・英文学) 箕浦忠了 (教授・西洋哲学) 安富信哉 (専任講師・真宗学) 古田和弘 (所長・教授・仏教学) 片野道雄 (主事・助教授・仏教学) 嘱託研究員 今井亮徳 (開教使・在米) 今枝由郎 (フランス国立中央科学研究所研究員) 大河内了義 (神戸大学教授) リノ・ベリーニ (本学非常勤講師) ジャン・ノエル・ロベール (フランス国立中央科学研究所主任研究員・高等学院講師) 彦坂周 (アジア文化研究所長・インド、マドラス) 宮下晴輝 (助手・仏教学) ロバート・ローズ (本学非常勤講師・仏教学) 研究補助員 ベンジャミン・H・渡辺 (神戸商科大学博士課程修了生) 橋本篤司 (博士課程)
西藏文献研究 (委託研究 代表 学長 廣瀬 泉)	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版西藏大藏経及び蔵外文献の文献研究」 研究員 小川一乗 (チーフ・教授・仏教学) 片野道雄 (助教授・仏教学) 小谷信千代、白館戒雲 (以上、専任講師・仏教学) 研究補助員 松田和信 (本学非常勤講師・仏教学) 中野素 (博士課程修了生・仏教学)
大藏経学術用語研究 (委託研究 代表 学長 廣瀬 泉)	研究課題 「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」 研究員 神戸和磨 (チーフ・教授・真宗学) 古田和弘 (教授・仏教学) 木村宣彰 (専任講師・仏教学) 延塚知道 (専任講師・真宗学) 一色順心 (専任講師・仏教学) 研究補助員 安藤文雄、三明智彰 (以上本学非常勤講師・真宗学) 萩原晃俊 (博士課程)

〈一般研究〉

昭和60年度「一般研究」研究目的紹介

既報のとおり今年度は、共同研究3件、個人研究3件の「一般研究」が推進されている。それぞれの取り組みられている研究課題並びにその「研究目的」を紹介する。

〈共同研究〉

『教行信証』章節の共通表示化への研究

研究代表者 幡谷 明
本学教授 (真宗学)

この研究の目的ならびに意義については、すでに『研究所報』(No.11, P.2)に記したので省略するが、今年度はこの目的に向けての基礎研究を『教行信証』関係資料の蒐集ならびに原典研究を中心に推進していく。

この研究は、共通表示研究(構成論研究)班(=A班)、原典研究班(=B班)ならびに関係資料研究班(=C班)の三班に分けて進めていく。まずA班では、

- (一) 講録の科文研究

- (二) 英訳書の章節の比較研究
(三) 明治から現代に至る『教行信証』に関する文献の章節研究
が主な研究事項である。

B班は、特に「化身土巻(末)」を中心に、

- (一) 原典未確定部分の明示
(二) 『定本親鸞聖人全集』第一巻、坂東本、西本願寺本および高田本の比較校訂
(三) 外典ならびに引文の研究
を推し進める。

C班は、

- (一) 『教行信証』に関する論文蒐集
(二) 『教行信証』の注釈書の中で、江戸末年までを中心に蒐集し、そのカード化を進める予定である。

〈共同研究〉

真宗寺院史料の研究

研究代表者 北西 弘
本学教授 (日本仏教学)

この数年来、文部省科学研究費による調査や市町村史編さんへの協力、さらには、昨年度の研究費による調査などによって、各地の真宗寺院を調査し、多量の真宗寺院史料(古文書・記録・什物)を写真撮影によって収集してきた。それらは仮目録の作成など一応の整理を行ったが、いまだ充分なものとは言えない。またその内容についての検討は、一部を除いてほとんどなされていない。今回の共同研究はこれらの史料の整理を行い、広く活用出来るようにすると共に、真宗寺院史料の体系的把握の方法を確立し、あわせて内容検討を行うことを目的とするものである。

その具体的な問題は以下のようなものである。

- ① 名号・絵像など什物の研究：これらは、その筆跡や

画法、あるいは裏書などによって、筆者、成立年代などの判断がなされてきたが、必ずしも共通の客観的基準が成り立っている訳ではない。すでに収集した多くの名号・絵像類を比較検討することによって、年代判定などの客観的基準を確立したい。

② 本願寺発給文書の研究：本願寺の発給する文書については様式論的に不明確な点が多い。しかるに近年の一向一揆・本願寺史研究の進展に伴い、本願寺文書の体系的研究の必要性がいわれている。すでに収集した美濃・近江文書及び昨年度収集した越前地方の真宗寺院史料により、本願寺文書の体系化を試みたい。

③ 「寺内」研究：すでに収集した文書によって美濃地方の真宗寺院の「寺内」の性格を明らかにしたい。「寺内」は中世日本の自由と平和を示す領域(網野善彦説)であるともいわれ、学界で重要問題となっている。一般史からの「寺内」論においては、その個別寺院の成立事情や「寺内」となった理由、あるいはその後の状況について必ずしも十分な研究がなされていない。この点を究明したい。

- ④ 地域と集団の研究：滋賀県マキノ町には三浦講とい

う真宗寺院集団がある。58年夏の調査によってそれら寺院に所蔵される文書・史料を重点的に収集した。これによって三浦講寺院と地域の関係を究明し、地域と寺院の関係についての基礎的論理を追求したい。

⑤ 寺檀制研究：美濃・近江・筑後で収集した史料のうちには多くの寺檀関係文書がある。これを検討することにおいて、寺檀制の実態、とくに半檀家制について、究明したい。

以上のようにすでに収集しえている史料によって研究は一応可能であるが、さらに、多くの史料によって裏づ

ける必要から、補充調査・再調査が必要となることが想定されている。

昭和59年度には、上記目的の前提となる史料整理の段階までしか終了しえなかった。本来の研究目的を遂行するため更にこれを継続したい。

なお次の具体的なテーマを追加したい。

⑥ 蓮如絵伝の研究：各地の寺院に所蔵されている蓮如絵伝を収集し、これによって蓮如没後の蓮如観がどのように展開したかを究明したい。

＜共同研究＞

「オックスフォード運動」の 根本理念と意義

研究代表者 多田 稔
本学教授 (英文学)

イギリス社会の最盛期であったヴィクトリア朝に最も強い衝撃を与え、後の凋落の種子となったものとしてこの運動をとらえ、この運動の主役であった John H. Newman と John Keble の思想と根本理念を解明し、それに連なる文人たちの作品を解説すること。そして、体

制内改革であったこの Anglican Church の改革運動が挫折し、運動の中心人物たちがローマ・カトリックに改宗した結果、その後のイギリスの文芸思潮はカトリシズムと審美的方向の両極化の方向を辿るに至った。カトリシズムの影響を受けた文学の極に立つものとして、Gerald M. Hopkins, T.S. Eliot, Graham Greene, Evelyn Waugh などがこの系譜に属するものと言えるだろう。審美的方向として John Ruskin, William Morris, Walter Pater, Oscar Wilde, W.B. Yeats などの流れが考えられ、両者の谷間に Matthew Arnold などを見ることが出来よう。こうした思潮にみられるこの「運動」の影響と反発を出来るだけ解明することも本研究の目的としたい。

＜個人研究＞

『注維摩経』の研究

研究員 木村 宣彰
本学専任講師 (仏教学)

鳩摩羅什によって姚秦の弘始八年(406)に訳出された『維摩経』3巻は東アジアの仏教圏に絶大な影響を与えた。この『維摩経』に対する現存最古の研究注釈書が『注維摩経』10巻である。これは『維摩経』の訳者鳩摩羅什とその門下の僧肇・竺道生・道融の注疏を合編編集したものである。従って本書はその後の『維摩経』研究の基幹となるものであり、中国・日本等の仏教思想上において極めて重要なものである。

この『注維摩経』の研究を完遂するには、その方途に従って(A)文献的研究と(B)思想的研究とに分けられるであろう。

まず、(A)文献的研究においては、(1)本書の合編編集の経過の究明、即ち成立に関する検討、(2)現行流布本と他の諸本との関係、(3)現行流布の『注維摩経』と現存の単注本との異同等が殊に重要な研究課題となる。(1)は、

現行の『注維摩経』は本来、羅什・僧肇・道生等の各師の注疏が流布していたのを或る時期に合編したものである。今日、各種の仏教辞典では、その合編編集を行なったのは僧肇であると記しているが、彼の序文など種々の文献を慎重に考察するとき、それは明らかに事実と反しており誤りである。しからば、いつ、誰によって、又いかなる意図で本書が編集されたかを究明しなければならない。(2)は、大正大藏経所収本・縮刷大藏経所収本・その他の刊本写本の間で、内容及び体載上相互に異同がある。是非とも厳密なる対照研究が必要である。(3)は、僧肇の『維摩経』注釈書の写本が単注本の形でトルファンから出土したことが報告されており、それと現行の『注維摩経』中の僧肇注との対比を行ない異同を検討しなければならない。

以上の様な考察を通して『注維摩経』の成立や各種流布本の系統など書誌・文献上の解明を試みる。

次に(B)思想的研究としては、(1)本書を通して鳩摩羅什の仏教思想の解明、(2)特に僧肇の注釈を中心として仏教と老荘思想との交渉、(3)竺道生の維摩経観などを考察し、その後の中国仏教が般若維摩の仏教から法華涅槃の仏教へと展開してゆく事実の解明の手掛りを得る。その他『注維摩経』を通して中国仏教思想上における重要課題の

研究を目的としている。

研究目的の達成には、上記の(A)(B)両面からの検討が是

非とも必要であるが、年度内の研究は特に(A)の(1)~(3)を集中的に行なうことになるであろう。

〈個人研究〉

真下飛泉研究

研究員 佐々木正昭
本学専任講師 (教育学)

真下飛泉(本名真下瀧吉)は「出征」「戦友」等の作詞者として又明星派の歌人として歴史に名を留めているが、真下はむしろ徹頭徹尾教育者であったと考える方が真下の実像に近いと思われる。真下は苦学して京都師範学校を卒業後、京都市立有濟尋常小学校訓導、京都師範付属小学校訓導、京都市立修道尋常小学校校長、京都市立尚徳尋常小学校校長、京都市立成逸尋常小学校校長、東山中学教諭、京都市市会議員を歴任しており、この間京都お伽俱樂部や京都少年義友軍の設立に協力したり、京都府教育会雑誌等各種雑誌の編纂、個人教育雑誌(月刊)の編纂と発行、教育関係論文の執筆、児童用唱歌、各種奉祝歌の作詞、等々の多彩な活動をしている。本研

究はできる限り資料を発掘して明治後期及び大正期に教育者として活動した真下の実像をその文化的、歴史的背景を考慮しつつ明らかにすることを意図するものである。これまでに「真下飛泉研究Ⅰ——生涯と業績——」(『関西教育学会紀要』第7号、1983年)、「真下飛泉研究Ⅱ——京都お伽俱樂部と真下飛泉——」(『関西教育学会紀要』第8号、1984年)、「真下飛泉研究——修道校時代の真下飛泉——」(『大谷学報』第62巻、第2号、1983年)、「真下飛泉研究Ⅲ——晩年の真下飛泉——」(『関西教育学会紀要』第9号、1985年)、「真下飛泉研究——尚徳校時代の真下飛泉——」(『哲学論集』第31号、1985)を執筆した。これまでの研究により、お伽俱樂部との関係、修道校時代、尚徳校時代、晩年については調べ得たので本研究においては主として師範学校時代の真下について調査研究するつもりである。そして時間の余裕があれば有濟校時代の真下、即ち『文庫』『明星』派歌人及び作家としての真下についての研究にも着手したいと考えている。

〈個人研究〉

保育者養成機関における 宗教教育の現状と課題

研究員 松村 尚子
本学助教授 (社会学)

昭和59年度の同一研究課題についての共同研究においては、以下のような諸点の追究、検討を行い、それぞれ一定の成果を収めている。

- 1) 本学幼児教育科創設以来のカリキュラム編成を中心にみた仏教教育の展開とその意義の吟味。
- 2) 欧米諸国の幼児教育界における宗教教育に関する文献資料の蒐集とその解題。
- 3) 本学幼児教育科卒業生の職業経歴と家庭生活における仏教教育の反映に関する実態調査の実施。

これらの成果に依拠しつつ、本研究においては、当初の研究目的にてらして先の共同研究においてなお不十分

であると考えられる面を補い、ひきつづき、本学の保育者養成における仏教教育の意義をさらなる課題及びその方向性を究明することを目的とする。そのために本研究においては次の点に焦点を定める。

- 1) わが国の他の保育者養成機関における宗教教育の実際に関して資料を集め、必要な調査と検討を行うこと。
- 2) 本学卒業生の生活意識及び児童観における特徴点を明らかにするとともに、それらの形成にあたって、本学での教育のいかなる面がどのように関与していると考えられるかについて、さらに調査検討を行うこと。

一般に、子どもの養育に関する家庭の機能の衰退、育児力の弱退化が指摘される今日、職業を通じてのみならず地域や家庭の場にあっても、専門的保育者としての教育を受けた者の役割は小さくないと考えられる。そのような意味からも、専門的保育者養成機関の一である本学幼児教育科における教育の質は、ふだんに問われ続けられねばならないであろう。

昭和59年度

「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

「真宗学事資料の研究」

嘱託研究員 草野 顕之

昭和59年度における指定研究「真宗学事研究」は、本年度のテーマを、昨年度に引き続き「真宗学事資料の研究」と定め、高倉学寮成立から現在の大谷大学へ至る、真宗大谷派「学事」に関わる資料を、広く収集・整理し、その研究を行った。

本年度の「真宗学事研究」班は、6名の研究員、3名の嘱託研究員、そして若干名の研究補助員・資料整理員という構成であったが、資料の収集・整理作業を嘱託研究員・研究補助員・資料整理員が、研究を研究員・嘱託研究員が行う形で進められた。

まず、収集・整理作業の面をみると、58年度までに大谷大学に蔵される近世「学事」関係資料の多くが、コピー又はマイクロフィルムで収集されているため、本年度は主に近代以降現代までの資料に重点をおいた収集がなされた。さらにその整理作業は、58年度同様、「真宗大谷派学事年表」の作成を最終的目標とするカード化作業を中心に行うことであり、本年度は特に近世資料を中心に据えたが、生の近世資料から直接カードをとることが困難であり、一旦原稿化する必要があったため、その作業に、資料整理班の多くの人員と時間を要した。そのため本年度においては、昨年度に比べると、余りカード化作業は進展しなかった。しかしながら、反面高倉学寮の基本資料たる「上首寮日記」が、全5巻のうち3巻余り原稿化され、今後の研究での利用率が高まった。

次に、資料の研究面では、年度始に各研究員が各自のテーマを提示し、それを随時研究会において発表・討議する形式をとった。そのテーマは、大きく講師や教学者など、人物に関する年譜を作成し、それに基づいて、その人物の行動なり教学なりを検討したり、高倉学寮の組織や制度面を明らかにするなどの、具体的「学事」研究

の方向と、「学事史」概念の検討を含む、「学事史」研究の方法論を課題とする方向との二方向をとった。その発表は、後掲する研究会で行われたが、「学事史」研究の方法論が話題となる一方、「学事」の具体的研究が始まるなど、「真宗学事研究」の最終目標たる、大谷大学三百年史編纂への歩みを見ることができよう。

さらに、このような研究を補完するために、外部講師による公開講演会も開催された。本年度は、近世が研究の中心であったため、近世における一般教育のあり方、また儒教等近世諸思想の様相、さらに他教団の学事、等の面での講師招聘が企画されたが、人選その他諸事情により、近世の一般的教育に関する講演会をもつのに終り、その他は次年度に持ち越さざるを得なかった。

以上、昭和59年度「真宗学事研究」は、概略このような研究経過をたどった。尚、本年度開催された研究会・講演会は以下のものであった。

〈研究会〉

- 第1回 5月31日 各研究員
「本年度の研究テーマについて」
- 第2回 7月12日 草野顕之嘱託研究員
「高倉学寮の組織について」
- 第3回 10月18日 木場明志嘱託研究員
「学事研究と門末教化」
- 第4回 11月22日 大桑斉研究員
経隆優嘱託研究員
「惠空年譜について」
- 第5回 3月14日 江上浄信研究員
「香月院深励師略年譜考」
鈴木幹雄研究員
「学事史における歴史意識」
若槻俊秀研究員
「公歳年譜について」

〈講演会〉

- 第1回 12月14日 津田秀夫氏（関西大）
「日本近世における民衆教育の性格」

海外仏教研究

「海外における仏教研究の 文献・資料に関する研究」

研究員 長崎 法潤
 嘱託研究員 ロバート F.ローズ
 研究補助員 山野 俊郎

仏教研究における国際化が、ますます進展している。「海外仏教研究」プロジェクトは、海外における仏教研究の現状をさぐり、仏教研究の方法を研究するために昭和57年に発足し、3年間の研究を続けてきた。

昭和57年度・58年度においては、北米における仏教研究を対象に、その動向を把握するために、学内外の研究者を招き研究例会をおこなった。資料検討会においては、北米における仏教研究の論文、特に浄土教関係の論文をとりあげ、その内容・方法論を厳密に批判し、検討した。

資料収集については、北米を中心にしての研究資料を主にし、ビブリオグラフィーを作成した。

昭和59年度においては、前年度の研究を継続しつつ、フランスにおける仏教研究の動向をさぐり、文献資料の収集に着手した。そのために基本的な文献目録をあつめ、逐次刊行物の収集をおもにおこなった。

なお、59年度の研究会、資料検討会、資料収集、ビブリオグラフィーの作成については、次に順次報告する。

〈研究会〉

定例の研究例会は、特にフランスにおける仏教学の事情を知るため、フランスの学者を招き、当地における仏教学の現状、ならびに方法論について話していただいた。その他海外の仏教研究者をまねき、研究発表をしていただき、研究員との意見交換がなされた。

- 1 5月29日
 Dr. Robert Duquenne (法宝義林研究所員)
 「フランスにおける仏教学研究」
- 2 7月10日
 Prof. Jean-Nöel Robert (フランス国立中央科学研究所主任研究員・フランス高等学院宗教学部講師・海外仏教研究嘱託研究員)
 「フランスにおける仏教学の現状」
- 3 10月25日
 Dr. Whalen Lai (カリフォルニア大学デービス校教授)

「像法決疑経について」

- 4 11月21日
 Dr. Carl B. Becker (大阪大学フルブライト交換教授)
 「浄土教における臨終体験」
- 5 12月18日
 安富信哉・宮下晴輝両先生を囲む茶話会・並びに海外仏教の展望についての話し合い
- 6 2月20日
 Alexander Naughton (真宗総合研究所客員研究員)
 「インド仏教における一切智の概念の発達」

なお、Dr. Whalen Laiの研究発表要旨は「像法決疑経の新研究」と題して、また、Dr. Carl B. Beckerのそれは「浄土教における臨終体験」と題して、共に『研究所報』第12号に掲載されている。

〈資料検討会〉

海外における仏教研究の方法論をまなび、それを批判的に検討するための資料検討会がもうけられた。

- 1 6月5日
 Ming-wood Liu: "The Doctrine of the Buddha-Nature in the Mahayana Mahaparinirvana Sutra" (*Journal of the International Association of Buddhist Studies*, vol. 5, no. 2, 1982, pp. 63-94)
 報告者: Robert F. Rhodes 嘱託研究員
 - 2 6月19日
 前回の続き
 - 3 10月16日
 Alfred Bloom: "Tannisho: Resource for Modern Living"
 報告者: 安富信哉研究員
 - 4 11月20日
 Carl B. Becker: "Religious Visions. Experiential Grounds for the Pure Land Tradition" (*The Eastern Buddhist*, vol. XVII, no.1, 1984)
 報告者: 山野俊郎研究補助員
- さらに、箕浦恵了研究員が、インドにおける "The First International Conference on Buddhism and National Cultures" に出席され、その報告がなされた。
- 12月4日
 「The First International Conference on Buddhism and National Cultures に参加して」
 報告者: 箕浦恵了研究員
- その内容については『研究所報』第12号に「第1回仏教・諸文化国際会議について」と題して発表されている。

◀ビブリオグラフィーの作成▶

欧米における仏教学関係著書・論文のビブリオグラフィーの作成は、「海外仏教研究」発足当時からおこなわれてきた。今年度は作成されたビブリオグラフィーを補充することにつとめながら、フランス語の著書・論文を1960年から1980年に限ってリストアップする作業がおこなわれた。その結果、著書カード約200枚と論文カード約200枚を作成することができた。また、本年度補充された分も含めて、英語のビブリオグラフィーでは、著書・論文をあわせて約4000枚のカードが収集されている。

◀資料収集について▶

本研究では、ビブリオグラフィーを作成するための基

礎資料として、欧米で発表されている仏教関係の研究書を積極的に収集しており、また、それらを学内外の研究者の利用に供している。

さらに、本年度はフランス語文献の収集を中心におこない、445冊の本を収集した。その内訳は次のとおりである。

英 語：308冊
 仏 語：58冊
 独 語：63冊
 日本語：10冊
 その他：6冊

なお、3年間を通じて収集した図書は、1200冊を越えている。また、仏教研究に必要と思われる逐次刊行物を50種類ほど購入している。

西藏文献研究

「大谷大学所蔵の北京版西藏大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

研究員 小谷信千代

本研究は次の二部門より成る。

1. 北京版西藏大蔵経丹殊兩部の勘同目録の編纂
2. 蔵外資料の研究

1. の勘同目録の編纂は、昭和33年に本学において影印出版された北京版西藏大蔵経を、他の二版（デルゲ版、ナルタン版）と対校し、その題名を初め、章題、著者名、訳者名、校訂者名などの異同を検討し注記して、研究者の便宜を計ることを目的とするものである。丹殊兩部の勘同目録の編纂は、昭和40年に第1分冊が出版されて以来、営々として継続されてきた。昭和59年度には第7分冊（般若部と中観部）がほぼ完成し、60年5月末に出版の予定である。

2. の研究に関しては、本学には上記の大蔵経（印度文蔵の西藏語訳）以外に、寺本婉雅や能海寛らの諸師によってもたらされた西藏文献が4000点以上も保存されている。このような膨大な収集は世界にも類がなく、内容的にも極めて貴重な資料を数多く収めている。昭和48年にその目録（『西藏文献目録』）を出版し、昭和55年に目録の和訳を出版して以来、国の内外から資料の問い合わせ

や公開の要望が数多く寄せられるようになった。

本学ではそれらの希望にそうべく、かねてより数名の研究員が文献調査を行ってきた。しかし乍ら、内容が、仏教では顕教密教の全般に及ぶものであることは言うに及ばず、歴史や語学を初め医学や天文学に至るまで、西藏文化の全域にわたっているため、内容調査の作業に長い時間を要した。その仕事も昨年度末を以て、文献の正式な題名の索引、略書名の索引、著書名の索引、内容項目別分類索引という索引類の原稿の完成という形で、一応の成果をあげることができた。59年度は、その再検討と西藏語タイプライターによる原版の作成が、当研究の主たる作業であった。この作業も年度内にはほぼ完成し、60年度中には出版する運びとなっている。

この作業と並行して、稀観本を影印出版するための準備を進めてきた。本学にのみ保存されている西藏文献は数10点にのぼると思われる。現在は、その中で影印出版すべき文献を選定し、その内容や著者などに関する紹介文を作成することに着手する段階に来ている。

また、上記『西藏文献目録』完成以後、本学は更に多くの西藏文献を購入してきた。これらの文献に関しても、その内容を調査し、目録を作成し、索引類を作り、既刊の『西藏文献目録』及び現在ほぼ完成している索引類に対する補遺として出版することが、研究者の便宜のために取り急ぎ為されなければならないことである、と思われる。

以上、本研究の59年度までの進捗状況を今後の計画と共に報告した。

大蔵経学術用語研究

「浄土教関係典籍における 学術用語の総合的研究」

嘱託研究員 一色 順心

大蔵経学術用語研究会の本年度の研究課題は、浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究で、当研究所の指定研究(委託研究)である。この研究は、『大正新脩大蔵経』第83・84巻に所収の日本撰述浄土教関係諸典籍(日蓮宗関係を含む)について、厳密な解説と学術用語の分類研究を行い、その研究成果を『大正新脩大蔵経索引』第43巻続諸宗部六として出版することを目的としている。既報のごとく、本研究が発足する以前の4年間は、『大正大蔵経』第72・73・74巻に所収の日本撰述華嚴宗関係典籍(戒律関係を含む)における学術用語の研究を遂行し、当初の計画どおり昭和59年2月末に『大蔵経索引』第39巻続諸宗部二を上梓した。従って前年度は、華嚴宗関係索引の出版に関する最終的な点検作業をするとともに、仏教系六大学の研究協力を得て浄土教諸典籍についても、各テキストの性格や用語の選定に関して問題点の整理および検討を行ったのである。この研究経過をふまえて本年度は、浄土教関係の総索引の出版を約2年後にひかえて、4名の研究員が、嘱託研究員1名、研究補助員2名、および本学の真宗学専攻の院生諸氏の助力を得て、当該の全典籍にわたって学術用語の選定(線引)を行った。さらに約12万語にも達する選定用語を学術用語カードに収録し、一部については分類研究を開始したのである。

『大正大蔵経』第83・84巻に収められる浄土教典籍は、8世紀より18世紀までの浄土教諸師の代表的な著作が網羅されている。大別するに、法然房源空を宗祖とする浄土宗の各派、親鸞を宗祖とする真宗、江戸時代の融通念仏宗、珍海や源信などの南部・叡山の浄土教など、日本浄土教の多岐にわたる諸典籍が含まれている。しかもこの蔵経中には、『往生要集』『選択集』『教行信証』などの漢

文体のもと、『黒谷上人和語灯録』『歎異抄』『蓮如上人御文』などの和文体のものが、双方ほぼ同比率の割合で編入されているのである。このような漢・和二種の諸典籍について学術用語の研究をなし、漢語と和語の両項目が含まれる総索引を作成するという試みは、日本撰述に特有な新たな問題も生じた。そこで、漢文・和文のどの典籍であっても、用語を選定する際には、単語または短い熟語として選定するという原則に立った。和文の場合には、ひとつの用語が比較的長文になる恐れがあった。しかし、後の作業の、三十項目分類や五十音配列にも影響を与えること、漢語との不調和をきたすことが予想されたので、ひとつの用語を最少限度の長さにかえらることに努めた。用語を説明したり限定を加える必要の生じたものについては、従来の方法にならって、線引段階でその作業を行なった。例をあげると、光明寺和尚(=善導)、論註(=無量壽経優婆提舍願生偈註)というように補った。と同時に、説明した語からも用語を検索できるように、善導⇒光明寺和尚、無量壽経優婆提舍願生偈註⇒論註という項目(見よ項目)を、五十音索引の該当箇所に入れる予定である。とくに和語の中には、片仮名の用語のみでは意味の通じにくい例があるので、スス(=珠數)、エソ(=蝦夷)などのように、必要に応じて漢語を補うことにした。

周知のごとく大蔵経索引は、音次索引(五十音索引)・分類項目別索引・検字索引(字画索引・四角號碼索引)から成り、これに収録典籍の解題および凡例を付して完成をみるに至る。本年度は、音次索引の作成を中心に研究と作業を進めたことになる。すなわち、『選択集』をはじめとする85点の浄土教典籍と『立正安国論』等13点の日蓮宗典籍について、1,290ページ分のテキストの解説研究と用語の選定およびカード化の作業が行われ、ほぼ所期の目的を達成できたと考えている。この大蔵経学術用語研究は、3年度にわたり文部省科学研究費補助金総合研究(A)の交付を受けている。その最終年度に相当する昭和60年度末には、学術用語の研究をほぼ終え、総索引に供すべき各原稿を完成することを目ざして、次年度からは、分類項目別索引の作成を中心に研究を進める予定である。

昭和60年度「一般研究」研究組織の一部変更について

昭和60年度の「一般研究」の選考結果は本誌前号において掲載されたが、研究組織の上で、幡谷教授の共同研究の研究補助員の中、池田理、篠原恵信にかわって畠山正信(博士課程)に、大桑教授の共同研究において、研究代表者は北西弘教授に変更され、研究員に草野顕之(専任講師、日本仏教史学)が加わることになった。

〈一般研究〉

昭和59年度「一般研究」研究概要

〈共同研究〉

『教行信証』章節の共通表示化 への研究

研究代表者 幡谷 明
本学教授 (真宗学)

この研究の目的ならびに意義については、すでに『研究所報』(No.11 P.2)に報告済みであるから、ここでは、これまでの研究状況について報告することにしたい。

当研究班は、構成員を、共通表示研究(構成論研究)班(=A班)と原典研究班(=B班)との二つのグループに分け、研究を進めてきた。研究事項を略述すれば、まずA班では、

- (一) 英訳『教行信証』における章節の研究、
- (二) 各種の真宗聖典および現代語訳に表われた章節の研究、
- (三) 科文の歴史的研究、
- (四) 『教行信証』関係資料の蒐集

が主な研究課題として掲げられる。(一)では、全訳あるいは部分訳されている英訳書の数種類について、章節の対照表の作成を続けている。(二)の真宗聖典については、明治書院版・法蔵館版・永田文昌堂版および東本願寺版の章節表示に関する比較対照表を作成してきた。(三)は、大谷派や本願寺派ならびに高田派の諸講録を蒐集し、その中で後世の『教行信証』理解に大きな影響を与えたとみなされる数種の講録の科文表作成を、主要目的とした。今後は、蒐集中の講録を大段の科文により分類し、それをもとに『教行信証』解釈史の一面を解明することに尽力していく。(四)については、特に明治以前の講義録を中心に資料蒐集を行ない、併せて大谷大学図書館所蔵の『教行信証』関係資料のカード化の仕事を進めている。

B班は、

- (一)『教行信証』四本(=『定本親鸞聖人全集』第一巻・

坂東本・西本願寺本および高田本)の比較研究、

- (二)『教行信証』所引の經論釈の典拠の研究

の二つの研究を計画し、施行してきた。(一)では、これまでに「教巻」と「行巻」について、四本による校異を行なった。幸いにも、坂東本・西本願寺本それに高田本の影印本は、すでに出版されている。それら諸本を基本テキストとし、厳密な文献の校異を完了した後、比較検討を推し進めていく。

(二)では、(イ)『教行信証』に引用された經典類の出典箇所調査、ならびに(ロ)その引文と大正大藏經との比較検討を実施している。(イ)と(ロ)の研究は、相互に推し進められるべき性質のものである。まず(イ)については、(a)御自釈中の引文、(b)第一引文、(c)第二引文および(d)第三引文^(註)をそれぞれカードに分類して収め、特に(b)(c)(d)の三については、三者相互の関連が一目瞭然と理解できるように工夫した。次に(ロ)に関しては、大正大藏經などを基本テキストとして校異を進めている。現時点での問題点は、親鸞の引文した經典類がどのようなテキストに依拠したものであるのか不明であり、写誤との区別が判然としないことである。そのため、校異の際には、「大正大藏經などを底本とすれば」という限定条件を始終つけなければならない。今後、(ロ)の作業を継続する一方、その成果を分析しながら、(イ)の出典箇所の問題点解決へ向けて探究していく予定である。

最後に、今までに開いた研究会の内容について略記しておく。昭和五十八年十一月に当研究の採用が決定した後、同年十二月に二回と昭和五十九年一月に一回の準備会をもち、年度当初からの研究が迅速かつ確実に進むように、討論を重ねた。その後、昭和五十九年度には、五月に研究の方向や進み具合を確認するための第一回研究会を開いたのを始めとして、昭和六十年一月まで計八回の研究会を行なった。この中には、講師を招き、研究について意見交換を行ない、審議を重ねた研究会も含まれる。

以上、研究の概要について記したが、次年度は各自の研究を独自に継続していくと同時に、総合的かつ立体的な共同研究を、さらに進めていきたいと思う。

註

親鸞が『教行信証』中に引用した經典類を第一引文とし、その引文中に引かれた經典類を第二引文とす

る。第三引文とは、第二引文中に引用された經典類を示す。

＜共同研究＞

真宗寺院史料の研究

研究代表者 大桑 齊
本学教授 (日本仏教史学)

本年度研究期間内において、つぎのような研究をおこなった。

一、収集史料の整理・研究

1、現状

従来より、文部省科学研究費の交付をうけて収集してきた真宗寺院史料や、後述の福井県地方の真宗寺院史料調査によって収集した史料（共に主として写真）の整理をすすめた。整理は、①伝来別（所蔵寺院別）に写真帳を作成、台帳に登録し、次いで②それにもとづいて調査時のカードを整備・補足し（実質的な研究作業）、③各伝来群について目録を作成するという手続きでおこなわれている。現在、①が終了しており、②③の作業を継続中である。

2、目録作成の基本方針

②の作業においては各伝来群の史料を命名し、分類するという手続きが必須であるが、この研究分野においては一般的な命名・分類方法が確立されているわけではない。中世末～近世の史料（とくに古文書）は、前代のそれにくらべて様式上甚だしい錯綜や変容があるが、真宗寺院史料は主としてこの時期のものであるため、ここに整理上の最大の困難がある。

また、命名・分類には恣意性の混入がさげがたい側面をもっており、したがって目録作成は極めて試論的性格の強いものたらざるを得ない。すなわち最終的には、一般共通の目録方法の確立を目ざしつつも、当面は便宜的なものにならざるを得ないということになる。命名・分類自体が史料分析として創造的であるためには、ひとたび一般性を放棄することが必要というべきである。

このような観点にしたがって、基礎作業をすすめる場合、命名・分類は、あらかじめ設定された基準に拠っておこなわれるものではなく、その基準そのものを多様なかたちで設置することが必要となる。そのためには、史料のあらゆる特徴＝差異関係を抽出してゆかなければなら

ない。これは極めてあたりまえの分析的視点であるが、ある意味では際限のない作業であり、それゆえ一般にはなんらかの水準で折合をつけられてしまうのが現状といえよう。本研究においては、右の認識から史料のデータ整理に重点がおかれることになる。しかし既収集史料は必ずしもこれに足るデータが採集されているわけではないので、あらたに、より密度の高い史料調査（史料収集）をすすめる必要がある。また、その準備もとのいつつある。

3、具体的整理方

前記のような立場にたちつつも、実際に作成・公開される目録が一般に利用されるためには、古文書学・書誌学・美術史学等の一般的ルールをふまえた目録方法を、いちおう設定せねばならないだろう。この点からみれば真宗寺院史料は、基本的につぎのような分野で構成されていると考える。

- (1) 美術・工芸品（造形的遺品）
- (2) 聖教・典籍
- (3) 文書
- (4) 記録

これら各分野の研究水準をふまえて必要データをカード化し、目録作成の基礎作業としている。

一、史料検討会ならびに研究会

1、史料検討会

史料整理段階で生ずる問題を検討・処理するために、毎水曜日午後四時からを研究員・嘱託研究員・資料整理員による意見交換の場にあてた。

2、研究会

真宗史料・真宗史にかかわる個別問題の研究会を二回おこなった。

第一回 テーマ・真宗寺院伝来史料の基本体系について

報告者・片山伸（資料整理員）

日時・10月18日、午後四時

内容

真宗寺院に伝来する史料群の基本的ありかた、つまりどのようなものが必然的に伝来することになるのかという点を問題にする。目録作成という基礎作業の結果、一般末寺史料の標準形、を知ることができるならば、各伝来群の特質を、それとの比較の上で抽出できるはずだとの観点を提起。

第二回 テーマ・久宝寺寺内町と河内門徒

発表者・上場顕雄（嘱託研究員）

日 時・11月22日午後4時

内容

戦国時代の本願寺直参坊主で、河内の有力寺院八尾慈願寺を核とする寺内町形成を、具体的にさぐると共に、一家衆顕証寺の成立・介入をめぐる生じた、慈願寺門徒団の動向に言及。

一、史料調査

11月6・7・8日、福井県大野市・勝山市・足羽郡美山町方面の真宗寺院史料調査をおこない、これを写真におさめた。なお、これによって収集された史料の日録を、

先の基本方針にもとづいて作成し、「研究成果」として報告する予定である。

1月18日、永観堂禅林寺所蔵の伝永観上人画像の調査をおこなった。この画像と同様のものが仏光寺派を中心として何点か伝来している。絵系図や光明本尊などとならんで、仏光寺系の門徒が依用した先徳像かと想像されるが、これに関する研究はほとんど皆無である。60年度もひきつづき調査を継続し、研究をまとめたたいと考える。

<共同研究>

近代文学における仏教的諸相

研究代表者 渡辺 貞麿
本学教授 (国文学)

(一)

この共同研究は、仏教は日本近代文学といかにかかわるかという課題と取り組み、その具体的な方法論を模索しようとするものである。その研究の具体的な計画として、昨年度(昭和五十八年度)は、特に宮沢賢治を取りあげ、仏教と近代文学とのかかわりを考え、賢治の諸作品の中に、因縁・十界互具・法の永遠性などの仏教思想が見られることを指摘し、そのような仏教思想が賢治の作品において、文学として実現されていることを知り得た。本年度(昭和五十九年度)は、賢治の作品のみならず、萩原朔太郎・外村繁などの作品についても研究し、仏教と近代文学のかかわりを深く追求した。詳細は『研究所紀要』第三号に発表する予定である。

(二)

本年度の共同研究の具体的事項について、簡略に報告する。

① 研究会は、昨年度と同様、原則として第二水曜日(午後四時から)開催し、宮沢賢治のほか、萩原朔太郎・外村繁などの作品について検討した。宮沢賢治については渡辺貞麿、萩原朔太郎については仲野良一、外村繁については喜多川恒男が中心となり、研究作業を進めた。その概要は左記の通りであるが、それぞれのテーマに關し、研究論文にまとめ、『研究所紀要』に報告した。

(A) 宮沢賢治の場合、思想の文学化の度合がきわめて高い。従って、その作品の中から思想を読みとるという作業は、はなはだしく複雑な手続きが求められる。

例えば、賢治が『春と修羅』の序詩において、「わたくしといふ現象は」と発想する時、その「現象」は、ただ単に「象としてのあらわれ」というような意味ではない。賢治にとって「わたくし」が存在ではなく、「現象」であるのは「わたくし」が因縁によって象としてあらわれたもの、と認識されていたからにはほかならない。あるいはまた、『注文の多い料理店』において、「わたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。」と賢治が書く時には、これはもはや単なる童話的な譬喩などではない。その背後に「一切のものは、それ自体として真如のあらわれである、という思想があることによってはじめて可能な発想であったのである。以上のような方法論によって、賢治においては、仏教思想が、文学としていかに実現されているかを検証したい。

(B) 日本近代詩史にひとつの転機をもたらした萩原朔太郎と宗教とのかかわりについては、従来キリスト教とのそれが多く論ぜられてきたのであるが、彼の詩作品やアフォーリズム全般を通してみると、それが情緒的な傾きをもちながらも、仏教的(小乗仏教)なもののかかわりの色濃いことがうかがえる。

そこに、ショーペンハウエルやニーチェを通してとらえられた要素があるとはいえ、彼はそういう歪みによってとらえられた仏教を、日本人の情想そのものとして、しかも近代人の感覚の充溢した近代詩の佳品として形象したのである。

(C) 外村繁の作品の宗教性については、氏の浄土真宗への帰依を抜きにして語ることはできない。

寺院の出身であった丹羽文雄自身が、自らの文学の宗教性が外村繁のそれに遠く及ばない、という意味のことを述べているが、その違いを明らかにすることによって、宗教と文学の関連の問題、文学の宗教性などを解明していこうという試みである。

② 研究資料調査状況については、各研究員が夏期休暇を利用して、国会図書館・国文学研究資料館・近代文

学館に出張し、近代文学関係の資料を調査し、入手したい資料をコピーするなどして共同研究の研究材料とした。

なお、研究資料調査の報告を、文献目録のかたちで『研究所紀要』に発表する予定である。この報告は主として

〈共同研究〉

保育者養成機関における 宗教教育の現状と課題

研究代表者 松村 尚子
本学助教授 (社会学)

標記の研究課題にたいして、我々は大きく二つの視点からのアプローチを試みた。

その一つは、わが国及び諸外国の幼児教育・保育界における宗教教育の現状と、その理念ないし思想に関する文献資料を収集し、かつ主要なものについての解題を行うことであった。この点に関しては、予め作製された文献目録のうち、現在、英・独・仏語圏の資料数十点が収集されているが、それらによって西欧諸国における宗教教育の動向の一端を知ることができる。その一例を西ドイツの場合にとってみると、おおよそ次のような状況がうかがわれる。

西ドイツにおける乳幼児の教育・保育機関としては、幼稚園、保育所、児童保育センター、学校幼稚園等の名称をもつ種々のものがあるが、とりわけ乳幼児保育センターをはじめとして、新旧キリスト教会により設立・運営される施設が現在も少なからず存在する。一九世紀中葉、かのフレーベルによる幼稚園創設以来、ワイマール共和国時代の就学前公教育の要求、一九二二年児童福祉法における幼児教育・福祉の公的保障原則の採択など、いくつかの画期を経ながらも、幼児の保育現場における宗教諸団体の勢力はなお強大であり続けてきた。しかし、一九六〇年代半ば以降になると、国民生活全般にたいする宗教（なかんずくキリスト教）の影響力の低下傾向が進むなかで、ドイツ教育審議会の教育委員会が就学前教育の改革と拡充の必要性を説き、その「構造計画」を勧告するなどの動きがみられ、次第に保育諸施設の教育的機能がより重視され始めるとともに児童福祉施設・行政における世俗化が進行するところとなっている。このような状況を背景に、就学前の乳幼児期という早期からの宗教教育の是非自体を問い、あるいはそのあり方を見直して新しい意味づけや方向性を模索しようとする試み

入部正純・石橋義秀が担当する。

③ 資料収集状況については、宮沢賢治と法華経に関する研究資料をはじめ、萩原朔太郎・外村繁など、近代文学と仏教にかかわる研究資料を収集した。

が、社会改革運動の面においてばかりでなく教会各派内部においても提唱され始めている。これらの動きが今後さらにはいかなる展開をみせ、いかに結実するかは定かでないとしても、少なくとも古くからの教義を中心におく教育ではなく、子どもにとっての宗教性の意味という点にたちかえって、就学前の宗教教育の問題が多くの人々の間で考えられ始める成り行きにあることは確かである。

なお、このような動向に関する研究成果の一部は、少しくまとまったかたちでほどなく報告できる運びである。ただ、保育者養成の機関及び課程における宗教教育に関連する文献資料の収集解題という点は、ひき続き追究されるべき課題として残されている。

本研究のいま一つの視座は、より直接的に本学幼児教育科における仏教保育教育の今日までの歩みをふり返り、その意義と課題を検討することであった。その一環として、一つは、本学がこれまで長期にわたって学生の教育・保育実習を委託し、ご指導をいただいていた多くの園の担当者からの実習学生にたいする評価・意見などを確認し、一応の総括を行うこと、二つには、本学幼児教育科卒業生を対象として、その職業及び家庭生活のうえに本学の教育がいかなる影響を及ぼしているかを問う実態調査を行うこと、を企図した。

前者に関しては、科の創設以来二十年近くにいる間のカリキュラム編成の変遷の意義を辿ることと併せて、年々の文書にみられる特徴点の整理と当事者からの聞きとりの作業を続行中である。一方後者に関しては、一九八三年度までの全卒業生1100余名に向けて調査票を郵送した。その後手許に返送されてきた回答は約400票である。質問項目は、フェイス・シート部分を含めて合計33。質問内容は、(1)仏教教育を柱とする在学中の学生生活、(2)卒業後の職業経歴と現在の職業意識、(3)友人との交流、(4)現在の子どもの観、(5)本学にたいする期待、を中心に構成された。現在、各調査項目の単純集計を終わり分析の段階に入っているが、回答の記述からは、現時点ですでに社会の中堅層を形成する年齢にある初期の卒業生をはじめとして、各地の保育界でまた家庭にあって、地道に思慮深く次世代を荷う子どもたちの育成に努める人々の様子が彷彿する。そこには、今日の乳幼児の育ちの過程にさまざまな歪みを見つめ感じとる一方で、それらを、現実の子どもをとりまく自然的社会的環境を視野におさめたうえで自らの生活信条とのかわりにおいて論評す

る姿勢が認められるように思われる。それはいまだごく表面的な印象の域を出ないものであるが、さらに分析を進めて、本学の仏教教育が卒業生の生活態度のうちにいかように反映しているか否かを追ってみたいと考えている。

今後の方向としては、この分析結果をもとにしながら、

〈個人研究〉

ゲーテの『ファウスト』研究 —『ヴァルプルギスの夜』について

研究員 岸 繁一
本学教授 (独文学)

「ヴァルプルギスの夜」は、古い伝説によると、5月1日の前夜で、聖女ヴァルプルギス(710~779)の列聖日に因んで名付けられた。元来この夜は異教時代に春の女神に捧げる夜の祭であった。キリスト教が伝播するにおよんで、古い信仰を固守し、改宗しない者は圧迫され、サタンの下僕または魔女とみなされるようになった。ハールツ山脈のプロッケン山で年に一度自然の豊饒を祈願する異教徒の儀式がいつの間にかサタンを擁して魔女たちが狂宴を張る集会に転化した民間信仰を生んだのである。ゲーテもこの起源に関心を抱き、悪魔視するキリスト教徒を逆手に取って、悪鬼に偽装して脅かす異教徒をテーマとした物語詩『最初のヴァルプルギスの夜』を作っている。天候の異変も魔女に結びつけられ、サタンに献身して極悪淫靡な酒宴に四方八方から飛来する魔女たちがこの夜人家、田畑を破壊すると信じられた。それと共に聖女ヴァルプルギスがこの魔女の妖術に対する守護神として崇められたのである。

ゲーテはファウストをヴァルプルギスの夜プロッケン山へ登らせる腹案をすでに初稿執筆の頃(1775)から抱いていたようであるが、実際に筆を取ったのは1800~6であった。したがって構想は種々変化しており、成立史も複雑な問題を提起する。しかし何より問題とされるのは初稿時代にほぼ仕上っていたグレートヘン悲劇の終りに近く挿入されているこの場面の持つ機能と意義である。グレートヘンの母の死に間接的な手助けをし、決闘で兄を殺害した二日後、すでに身籠り苛責の靈にさいなまれる恋人を捨て、浮かれ気分でプロッケン山へピクニックにでかけるファウストは不自然な印象を与える。登山体験は僅か一夜の出来事である。しかしこの場面に続く「曇れる日」では恋人は嬰兒殺しの罪で囚われの身になっている。現実には少くとも二、三カ月を必要とす

さらに他の資料、たとえば日本私立短期大学協会に所属する他の保育者養成機関関係の刊行資料等との対比を行うことなどによって、所期の目的である本学の保育者養成における仏教教育のあるべき姿を追究するよすがを得たいと思っている。

る時間的矛盾がある。これは象徴的文学を解しない愚問としても、この山を幾度も訪れている作者の経験を反映して登山の道筋は適格に写實的に描き初められている。かとおもうと、案内の鬼火の出現とともに樹木や岩が動き出し、夜行動物が人を欺く「夢と魔法の領域」に変わる。施風の吹き荒れる空には魔女たちが、火かき、箒、豚、山羊などおもしろい乗物にまたがって押し合いへし合いしながら飛んでゆく。魔女ばかりでなく男の魔の群もあり、飛行できずよちよち登りの半魔女もいる。まさに百鬼夜行の混乱状態である。このような幽鬼の世界に突然將軍、大臣、成上り者、作家が出現して幻想から現実へ復帰せしめられる。登場人物をざっと挙げただけでも筋の発展とはひどくかけ離れた夾雑物がふんだんに投入されている。場面の終りでファウストが裸の魔女とわいせつな文句を歌いながら踊っていると、その口から赤い鼠が飛び出し、驚いて魔女から離れる。それとともに両足を鎖で縛られ、首に一筋の赤い紐飾りを持つ蒼ざめた美女を遠くに見つけ、グレートヘンかと思う。メフィストの誘惑に乗り、低劣な淫楽の極地に達しても、「正しい道を忘れない」(主の言葉)ファウストの良心がやっとな顔を出してホットする。しかしまだかの女のもとへは戻らない。「ヴァルプルギスの夜の夢」の場面が続く。「オーペロンとティターニアの金婚式」と題された間狂言である。妖精の王と王妃が長年の確執の後、和解して金婚式を挙げ、大勢の客を招待するという趣向である。他の妖精たちも登場するが、前場に比してより多くの現実的人物がつぎつぎ現われる。たとえば、正教信者、北方の芸術家、純粹主義者、独断論者、観念論者等、当時の文学、芸術、哲学、政治、社会の領域からただちに誰であるか推定しうる人物やグループである。なかには本名のままのものもいる。ファウストとメフィストは観客側にまわっているか、一言も言わない。それ故このインターメッツォは前場に増して本筋から逸脱している。

『ファウスト』学者の多くもグレートヘン幻影を見る主人公の部分重視するが、その他、特に現実的人物の登場する部分はゲーテのつまらない時代批判、人物諷刺として冷淡に扱っている。たとえばリッカートは不必要な例として亜流啓蒙主義者ニコライを諷している。間狂言についてはほとんど触れていない。

このような解釈は善悪についての解釈があまりにも狭いのではないかとおもわれる。「第二部」も含めて『ファウスト』は一般の宗教的・倫理的概念では律しきれない。「天上の序曲」と「第二部」の終曲はキリスト教的外観を呈するが、中味の異質であることはもはや動かしえない定説である。ドイツ観念論が確立した倫理観からもずれている。では何か、と云えば、ゲーテ独自の自然観に根ざしていると考えられる。自然の生成と破壊が人間道徳の向上と墮落に反映する。そこに視点を置くと、この両場面の本筋から遊離して見えるものが有機的につな

がってくる。合理主義を標榜し、心霊などの存在を否定したが、自らは幻覚に悩まされ、尻に蛭をつけて放血し、治癒したといわれるニコライは臀部見霊者と皮肉られ否定されているのみではない。裸の魔女にうつつを抜かすファウストがそれから離れる間接因にもなっている。科白の意味の表裏、仮象と真実、冗談と真面目が万華鏡のように交錯してファウストはこの北方の魔界から離脱する。メフィストからはまだ離れることはできないけれども。

＜個人研究＞

ツォンカパ造『了義未了義論善説心髓』の解読研究

研究員 片野 道雄
本学助教 (仏教学)

本研究は研究課題に示すように、チベット仏教における偉大な学僧として周知せられているツォンカパ(Tson kha pa, 1357-1419)の代表作『善説心髓』並びにその関係資料の解明を、その所期の目的とした。

すでに、ツルティム・ケサン(白館戒雲)氏の「Tson kha paのDran nes legs bśad sñin po『未了義・了義善説心髓』について——シノプシス——」(『印仏研』26—2所収)において、この資料全体の科文が紹介されているところによっても知られるように、この文献はツォンカパ独自の仏教学概論とも称すべき性格のものと思なされる。

この文献を中心とする諸資料の解読研究に関わる中、かつて、難解な個所については後日補訂することとして、誤読、悪了解を顧みず、彼此、拙稿を試みてきたのである。

それらの作業を通じて、チベット仏教圏に多大な影響をもたらしているツォンカパのチベット仏教学、殊に、チベットにおける仏教思想展開の様態と共に、インド仏教思想の受容の基本的立場が具体的に披瀝されている重要な資料の一つとして確認されてきたのである。

拙稿「ツォンカパ造了義未了義論の試解(一)」(『大谷大学研究年報』34所収)においては、本論の冒頭より前編「唯識章」(仮称)の途中までを、和訳をもって解読紹介し、併せて、本論の結章についてもこの拙稿序文中で聊か考察した。また、「インド仏教の了義未了義思想について」(『日本仏教学会年報』47所収)においては、

前編と共に後編「中観章」(仮称)の序説に相当する、ナーガールジュナの著作に基づく論述に導かれながら管見したのである。「中観章」のその序説に相当する個所の和訳解読研究は拙稿「チベット仏教における大集経受容の一形態」(寄稿済、論文集未刊)において試みた。

本研究は、これまでの若干の研究成果を踏まえ、そこに提起されてきた諸問題を改めて吟味検討すると共に、可能な限り、注釈書類の探索・参見を試みつゝ、全体にわたっての、より確かな解読研究を志向してきた。特に、後編「中観章」の中、前記拙稿で取り扱った条項以降、即ち、スヴァータントリカ及びプラーサンギカの上に伝承する仏教思想に基づく論文について、その解明に重点をおいて進めてきた。時間的制約もあって、この研究の完結をみるに至らなかったが、その中において、拙稿「大乘唯識思想の成立——ツォンカパ所引の『中辺分別論』所説を通じて——」(『仏教学セミナー』39所収、1984)は、本論の前編「唯識章」のなか、『中辺分別論』相品第1・2偈を中心に論究する論文を試解しつゝ、前記拙稿「試解(一)」において取り扱った資料の一部についても改めて検討し、管見を試みたものである。

この文献資料に対して、漢訳としてはすでに法尊によってなされているが、昨年末に、下記のような英訳による研究が刊行されている。Robert A.F. Thurman, *Tsong Khapa's Speech of Gold in the Essence of True Eloquence*, New Jersey, Princeton University Press, 1984. 本論の解読研究を通じて、インド仏教の精神史に対する視点が著作ツォンカパにとって如何にあったかということも、常に関心事とするところであるが、更なる研究をおし進め、いずれその成果を取り纏めたい。

研究所報 第13号

1985年9月2日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603 京都市北区小山上総町